『源氏物語』と『紅楼夢』についての比較研究

－ ヒロインを中心として －

周 硯舒*
yanshurabbit@hotmail.com

Contents

Ⅰ．序論
Ⅱ．芙蓉、牡丹、桜 いずれも花
Ⅲ.それぞれの花 それぞれの芳しい香り
Ⅳ結論

Ⅰ．序論

『源氏物語』は11世紀の初め、日本の紫式部によって完成され、光源氏という主人公の一生、また彼のまわりにいた女性たちとの恋を描いたものである。『紅楼夢』は中国の清の時代、曹雪芹と高蘭墅によって完成され、賈家という貴族家庭の栄枯盛衰、また賈宝玉という坊っちゃんと何人もの女性との恋、及びそのまわりにいたたくさんの女性たちの運命を描いたものである。この二作品は、成立年代はかなりはなれているが、相似するところが多い。

まず、両者とも長編である。『源氏物語』は五十四巻からなり、作品時間で七十四年間、登場人物約四百九十人という膨大な世界を描いた。これに対して、『紅楼夢』は百二十回からなり、前80回は曹雪芹の作、後40回は高蘭墅の続作といわれて、作品時間で百年以上、登場人物についてはまだ定説がないが、三、四百人から八、九百人まで、それぞれ説がある。

次に、両者とも高い芸術性を持っている。日中両国の古典文学の最高傑作として、後世に大きな影響をあたえたと言われている。『源氏物語』は流麗優美な和

＊ 中国内モンゴル大学外国語学院日本語学部専任講師。

교보문고 KYOBO Book Centre

文体で、たくさんの和歌と漢詩が介在し、これに対して、『紅楼夢』の中にも詩作がたくさんある。例えば、黛玉の『葬花詞』[1]1)、宝玉の『芙蓉女児の誄』など。これらの詩作は名作にもなって、三百年来、人々に愛読されてきた。

それから、この二作品を理解する上で、最も重要なのは、両者の内容上の相似である。つまり、一人の男性貴族とそのまわりにいた女性達の運命、また彼らの贅沢な貴族生活とその栄枯盛衰を描いたところである。

本論で黛玉、宝釵と紫の上について論じたいが、それはこの三人をそれぞれ『紅楼夢』と『源氏物語』の女主人公と認める前提の下で行ったのである。実は、この作品の女主人公については、まだ論争がある。日本では藤壺、あるいは続編に出てきた浮舟を『源氏物語』の女主人公とする説も強いし、一方、中国では史湘雲が『紅楼夢』の本当のヒロインだと言う説もある。これについて私の考えでは、藤壺は光源氏にとっては、とても重要な存在だったが、人物の現実味については、紫の上より更に薄かったといえるし、その出番もあまりにも少ない。紫の上は元々藤壺の代わりとして二条院に来たのは事実だが、その後自分の努力を経て光源氏の最愛の人になったのも確実である。それは藤壺の出家とその後の死は、光源氏に大きな打撃をもたらしたが、紫の上の死ほど致命的な打撃をもたらしていないことからも分かる。それに対して史湘雲が『紅楼夢』の女主人公であるという説は『紅楼夢』の後の40回が続作になれないという説と大きな関連がある。衆知の通り中国では高鶚の続作は『紅楼夢』を研究する多くの学者に嫌われている。前の80回と比べると、この後編40回は文采がないとも言えるし、又、もっとも甚だしい行為は、高鶚は、曹雪芹の本意に背いてその結末を改ざんしたといわれている。例えば、周汝昌氏は史湘雲は最後に宝玉と結婚して、また、一緒に生活していくべきだと言っている。『紅楼夢』の前編の内容から見るとその可能性がないとは言えないと思っているが、しかしながら、最後に誰が宝玉と結婚したとしても前80回で最も重要な女性人物像として登場し、また曹雪芹がこの上なく賛美した黛玉の地位は揺らぐことはないだろう。

中国ではこの二作を比べて研究する人が多い。例えば、陶陶氏[2]2)は『紅楼夢』

1)『紅楼夢』では、黛玉のこの詩について、実は題名がついていないが、後世の人は普通このように言う。

교보문고 KYOBO Book Centre

と『源氏物語』の悲劇性について比較している。また、主人公の賈宝玉と光源氏について比較する研究も多い。女性主人公のほうの比較はわりと少ないが、周青氏[3]3)は紫の上と宝釵について比べたことがある。周青氏はこの二人の女性の悲劇的な運命に重点をおいて、二人とも封建社会の犠牲品だという結論を出した。また黄燕尤氏[4]4)は黛玉と紫の上について比べている。二人とも多情な才女だが、精神の面においては、大きくかけ離れている。黛玉は自我意識が強く、宝玉と同じ、社会風潮に逆らう思想を持っていると述べている。以上の研究は単に紫の上と黛玉、あるいは紫の上と宝釵の相似と相違について分析した。確かに、紫の上は理想的な女性と認められているが、実は黛玉と宝釵の集合体とも言える。多才で、家を治める能力を持っている点から見ると、紫の上と宝釵は似ているが、素直で清い心をもっているほうから見ると、むしろ紫の上は黛玉と同様だとは言えよう。本論では、これらの研究を踏まえた上で、この二作の女性主人公である林黛玉、薛宝釵と紫の上の相似と相違について、探究していきたい。またこうした研究をもとにして、両作者の女性観についても明らかにしたい。

Ⅱ．芙蓉、牡丹、桜 いずれも花

『紅楼夢』と『源氏物語』は黛玉、宝釵と紫の上をそれぞれ芙蓉、牡丹、桜に比喩されている。いずれも花にたとえている。いずれも美しく芳しい花である。

前でもふれたように、この二作は類似している。そして、この二作のヒロイン、すなわち黛玉、宝釵と紫の上についても、実は似ているところが多いと思う。本章ではこの三人の類似点について分析しようと思う。

2) 陶陶「異曲同工的哀歌－論『源氏物語』与『紅楼夢』主題的悲劇性」『紅楼夢学刊』、1990年第4号。
3) 周青「紫姫与薛宝釵－両個封建淑女形象之比較」『国外文学』、1990年第2号。
4) 黄燕尤「気質相同精神迥異―黛玉、紫姫形象之比較」『寧夏教育学院・銀川師専学報』、1991年第3号。

교보문고 KYOBO Book Centre

1.1身分は高貴、結末は悲劇

まず、三人とも貴族の出身である。

黛玉の父親は林如海という人である。作品の中にこのように紹介した。

> 先年の科試に探花(第三番)で合格した人。今では蘭台寺大夫(もと漢、唐の官名。ここでは借りて用いた。官吏の監察をつかさどる役目)にまで出世をしております。本籍は姑蘇の人で、このたび勅命により地方へ転出、巡塩御史となりましたが、着任してまだ一月の余にしかなりません。そもそもこの林如海の先祖は、代々諸侯の爵位を受け継いで、いまこの如海までにすでに五代を重ねています。当初はただ三代までの襲爵を許されたのが、今の天子の聖徳あまねく、前代にも例のない格別の思しめしで、如海の父の代になってさらに一代襲爵しました。ところが如海の代になると、これは科挙の道を通って官界にはいったわけですから、家代々の名門でもあり、また学問の家柄でもあります。5)5)

以上の引用からみると、黛玉のお父さん林如海は家柄が輝かしい上、科挙試験の三番目を取って、出生したので、封建社会の正統性を持っている。そして、巡塩御使という官職は実権を持って、政府の金袋を握っている人物である。更に、黛玉のお母さんの実家はこの本の中に出てきた金陵というところの四大家族の一つの賈家である。

薛宝釵はこの四大家族の一つの薛家のお姫様である。金陵の四大家族については、当地の役人たちが自らの役職安泰を祈願する「守り札」の中に、このように書いている。

> 賈は仮(にせ)にあらず、白玉にて堂を建て、金もて馬を作る。
>
> 阿房宮、三百里とかいうなれど、金陵の史一家を住まわせきれぬ。
>
> 東海に白玉ののたらざるときは、竜王もきたりて借りる金陵の王家。

5) 曹雪芹と高蘭墅(1962)『紅楼夢』伊藤漱平訳、平凡社、p18。

교보문고 KYOBO Book Centre

豊年にこの大雪、真珠も土くれ同然、金も鉄同然。[6]6)

これにより、賈・薛両家族がいかに盛んであったかがわかる。

黛玉、宝釵に対して、『源氏物語』の中の紫の上は、昔の按察使大納言の姫君と兵部卿の宮の娘で、身分も極めて貴い。

しかしながら、この三人の育った環境は決して恵まれていたとは言えない。三人とも小さい時に、両親またはその一人が亡くなり、黛玉は両親とも亡くなっているが、宝釵のほうは父親、紫の上は母親が亡くなっている。黛玉と紫の上はどちらも外祖母に育てられたのである。

また、三人とも結末は悲劇的である。

黛玉は病気の体で、宝玉と宝釵の結婚で打撃を受け、悲しみにくれて死んでいった。宝釵は宝玉と結婚したが、宝玉の最後の出家で未亡人になった。紫の上は光源氏の深い愛を得たが、光源氏の色好みを一生苦悩していた。最後病気にもなり、弱々しく死んでしまった。

1.2美人かつ才媛

『紅楼夢』では、黛玉を芙蓉、宝釵を牡丹と比喩している。

主人公賈宝玉と初めて会う時の黛玉は「ひそむるがごとくひそめざるがごとき霞こめたる両の三日月眉、喜ぶがごとく喜ばざるがごとき情をたたえた双の杏なす眼、両頬の靨に添わる愁いは態となり、一身に根をはる病いは嬌に見する。涙の光りて点々と、嬌な喘ぎもひそやかに、静かに坐するそのさまは嬌花の河水に照りはゆるかと、ゆらゆらと歩むすがたはしだれ柳の風まかせ。胸は比干に比するも孔一つ多く、病いは西施とくらぶるも三分は勝る」[7]7)と語った。

黛玉に対して、宝釵は「は銀の盆のごとく、眼は水々しき杏のごとし。は紅をささざるに赤く、眉は黛をひかざるに翠色なり」[8]8)、「生れつき肌はつややか、

6) 曹雪芹と高蘭墅(1962)『紅楼夢』伊藤漱平訳、平凡社、p41。
7) 曹雪芹と高蘭墅(1962)『紅楼夢』伊藤漱平訳、平凡社、p35。
8) 曹雪芹と高蘭墅(1962)『紅楼夢』伊藤漱平訳、平凡社、p316。

교보문고 KYOBO Book Centre

立居振舞いもしとやか」[9]9)である。

『源氏物語』では、紫の上を桜と比喩して、その容貌について、たくさん描いている。例えば、三十四巻若菜(上)では、このように書いている。

> 院は自室のほうへお帰りになった。あちらで女三の宮、桐壺の方などを御覧になって、それぞれ異なった美貌に目を楽しませておいでになったあとで、始終見馴れておいでになる夫人の美から受ける刺激は弱いはずで、それに比べてきわだつ感じをお受けになることもなかろうと思われるが、なお第一の嬋妍たる美人はこれであると院はこの時驚歎しておいでになった。気高さ、貴女らしさが十分備わった上にはなやかで明るく愛嬌があって、艶な姿の盛りと見えた。去年より今年は美しく昨日より今日が珍しく見えて、飽くことも見て倦むことも知らぬ人であった。どうしてこんなに欠点なく生まれた人だろうかと院はお思いになった。[10]10)

ここで分かるのは、『紅楼夢』であっても『源氏物語』であっても、そのヒロインに世にも珍しい美しい容姿をもたせている。

また、三人とも才芸のある女性である。黛玉、宝釵は二人とも詩人である。大観園の中に住む人達と詩社を結んだ。そして、いつも詩を競り合って楽しんでいた。黛玉、宝釵はそこでたくさんのすばらしい詩を詠んだ。例えば黛玉の『白海棠を詠える』、『菊に問ぬ』、『菊を詠いて』、『桃花行』、宝釵の『白海棠を詠える』など。また黛玉が桃の花を埋める時に吟じた『葬花詞』は最も有名である。

> 花吹雪 空をおおいし花のとき
> その色香 せては誰か憐(あわれ)まん
> なよなよと しだれ柳は にゆれ
> ふうわりと れる柳絮(わた)の 簾(みす)を叩ける
> 深き少女子(おとめご)は ゆく春惜しみ
> 胸に満つ 愁(うれ)いの緒 とくるひまなし

9) 曹雪芹と高蘭墅(1962)『紅楼夢』伊藤漱平訳、平凡社、 p45。
10) 紫式部『源氏物語』与謝野晶子訳、http://www.genji.co.jp/yosano/yosano.html。

교보문고 KYOBO Book Centre

花鍬(ぐわ)を手に 閨立ちいでけるが
散る花を踏みしだくさえ傷ましや
糸柳 の実と 香りも高う
桃李(すもも)の 花飛ばするも知らぬげに
桃李 こん年もまた花つけめど
誰ありて こん年にまで長らうる
……
願わくば わが脇に の生(お)いて
花とともに 飛びゆかな 空のに
天路(あまじ)のはて
いずくにかあらめ
かじ かの錦に艶骨(ほね)収め
ひとくれの浄き土もて埋めんに
もとの身にしあれば 無垢にてる
溝(みぞ)川に 汚れんよりはましならん
れの今 身まかりて われのれる
わが身とて いつの生命と計られず
そのわれの 花埋むるを と笑え
いつの日か われを葬るはそもぞ
見よ春の 尽きんとし 花散りしきる
これぞこれ も老い死すの時[11]11)

この詩を詠むことで、高潔で才気活発な黛玉の姿が浮かんでくるだろう。

宝釵は文学のほかに、芸術、歴史、医学、仏経にも詳しい。また家を治める能力もある。第五十六回『探春 利をして宿弊を除くのこと 智慧者(ちえしゃ)宝釵 小恵を与え大体を保つのこと』という回で、王熙鳳は病気になったので、探春、李紈と宝釵に頼んで、大観園を管理した。そこで、宝釵の知恵と能力が非凡であることが伺える。

11）曹雪芹と高蘭墅(1962)『紅楼夢』伊藤漱平訳、平凡社、p300。

교보문고 KYOBO Book Centre

紫の上は小さい時から光源氏に養われ、とても良い教義を受け入れ、もっと多芸多才である。「少女は二条院の西の対に暮らし、絵や書、音楽、姫君の心構え、あらゆるたしなみを光源氏から教えられました。利発で芸術的な素質に恵まれ、書や琴はどんどん上達。」[12)]12)そして、六条院に暮らした約十年間、「裁縫上手で、染物や織物の見立てのセンスも抜群。音楽にも秀でている」。[13)]13)また、紫の上も家を治める能力がある。光源氏が須磨に流謫した時、紫の上は二条院をよく管理していた。また、六条院の盛んになったのも紫の上とは大きく関係がある。

Ⅱ.芙蓉、牡丹、桜 違う花

芙蓉、牡丹、桜、いずれも美しい花であるが、やはり特質の違う花である。黛玉、宝釵と紫の上は違う作品の中に生き、違う作家の意図を担い、その個性や境遇はやはり異なる。本章ではこの三人の異なるところに重点をおいて、それぞれの特質を明らかにしたい。

2.1三人の異なるところ

ここで、黛玉、宝釵と紫の上の異なるところを表にしてみる。

12) 鎌田敏夫(2004)『別冊和楽』秋冬号、小学館、 p184。
13) 鎌田敏夫(2004)『別冊和楽』秋冬号、小学館、 p186。

교보문고 KYOBO Book Centre

	林黛玉	紫の上	薛宝釵
身の上	最も悲惨。 幼い時父母を皆、亡くす。 紫の上と同様、外祖母に育てられるが、外祖母にはまだ孫がたくさんいる。黛玉のことを一々配慮する余裕がない。 体が虚弱で不治の病がある。	母がなくなったが、外祖母に可愛がれていた。 また早々に光源氏に会ったことはその後の幸運にも不幸にもつながっている。	父が亡くなったが、母と兄がいる。 家も豊かだ。 二人に比べて、より幸運だとは言える。
性格	寄生生活のせいで、物事に敏感すぎる。 宝玉と同じ、世間の功名に熱心ではない。 心が清く、素直な人である。 (黛玉の性格については、以下で詳しく論じる。)	光源氏が多くの女性と付き合うことに少し嫉妬の気が起こったが、やはり優しくて、温厚篤実な人である。	思慮深い。 いつも宝玉に功名を立てるよう勧める。 人々から温良恭倹だと評価された。 (宝釵に対しての評価は曖昧であるので、下の文で詳しく検討する。)
恋愛	理想的な愛情を求める。 宝玉とは互いに唯一の知己である。宝玉に深い愛を持っているが、封建主義の下では、その愛を伝えられない。	光源氏から最も多く寵愛を受けたが、また、色好みで恋多き光源氏のことに傷付けられ続けた。	宝玉には激しい愛情が見えない。
結局	最も悲惨。 宝玉との恋を自分のすべての世界としたので、宝玉を失った時、黛玉の生命も無意味になる。 黛玉の死は『紅楼夢』の中で最も痛ましいところと言えよう。	『源氏物語』は光源氏の死の事を隠したので、紫の上の死は最も悲しく見える。	宝玉に出家され、宝釵の結果も幸いではないことがわかる。

以下第二節 で、黛玉、宝釵と紫の上の性格についてさらに検討しようと思う。

2.2紫の上と宝釵、黛玉と宝釵

紫の上と宝釵はその当時の社会の下では、理想的な女性だと言えよう。二人の最も似ているところは、中庸の美と徳を保っていることである。

紫の上は、色好みで恋多き光源氏のことに傷付けられ続けたが、なだらかで、夫に逆らわず、一生光源氏を愛していた。浮気なこともなくて、一意専心で光源氏を愛していた。光源氏から最も多くの寵愛を受けたが、高ぶる気がなかっ

교보문고 KYOBO Book Centre

た。光源氏のほかの愛人と和やかに付き合うこともできた。

紫の上に対して、宝釵は、封建社会の礼儀作法を厳しく守っていた。

封建時代の中国では、女は才がないのは徳だとされていた。[14]14)宝釵はそれを信じていた。そして、いつも針仕事をしていた。また、それこそ女達の本業だと思っていた。第四十二回で宝釵は黛玉を勧めたことがあった。「わたしたちのような娘は、文字など読めない方がいいのですわ。」そして、宝釵はいつも質素でいた。第四十回で宝釵の部屋の様子を描いた。「さて屋内に進み入りますと、まるで雪洞同然、ガランとして骨董というものが見当たりません。机上には二三本菊を投げ入れただけの定窯(宋代定州でできた焼物)の素焼きの花瓶がポツンと置かれ、ほかに書物が二三冊、茶筒・茶碗とあるくらいのもの。寝台のうえには、青い紗の帳子(カーテン)をさげたきりで、夜具もごく素質な品です。」また、彼女はずっと宝玉をその社会の「正しい道」(つまり学問を修める、功名を立てる)に歩むよう勧めていた。

これらは全部、封建社会の女性の美徳である。

しかし、宝釵と紫の上は本当に似ているのだろうか？この点について論じる前に、まず、黛玉と宝釵についての比較を行おうと思う。

林黛玉と薛宝釵は中国の文学界ではとても論争的となる人物である。

黛玉は口利きで、いつも人をあざけり、実際、人からも口が悪いと言われている。例えば第二十回の『王熙鳳　正言もて妬意をくのこと　林黛玉　俏語もて嬌音をうのこと』の中に、このような場面がある。

> ふたりがちょうどはなしているところへ、湘雲がやってきて、笑いながら、「次のお兄さまと林のお姉さまったら、あなたがたまいにちごいっしょに遊んでらっしゃるくせして、わたくしがやっとしばらくぶりにうかがえたというのに、ちっともあいてになってはくださらないのね」

14) 知識がないこそ思想がない、それで男や男の統治するこの社会に逆らうこともできない。またそれで家事にも熱心になる。だから、才もない、家事のできる女こそその時代の理想的な女である。この話は最初に文字で現れたのが明の時代の陳継儒の『安得長者言』という本である。しかし、男女の才徳観に対するこの言い方は昔からもうあったと言われている。

교보문고 KYOBO Book Centre

黛玉は笑いながら、「舌たらずさんにかぎっておしゃべり好きだとはねえ。だってこんな次のお兄さまってこともいえないで、好きなお兄さま。好きなお兄さまって連発なさるんですものね。あとで碁でも囲もうものなら、また『一二(いちすきな)』『一二(いちすきな)』ってやらかすおつもりでしょうよ」

……

すると湘雲が、「こちらったら、これっぽちも人を大目にみるってことがおありにならないのね。もっぱら人の揚げ足とり。いくらご自身が世間の人たちよりご立派だとしたところで、なにも会う人会う人、みなつかまえてなぶりものになさらずともいいでしょうに。……でも、ひとりわたしが名をあげますわ。あなたにその方のアラがさがせようものなら、わたし、かぶとを脱ぎますけれどね」

黛玉はせきこんで、「してそのは？」とただします。湘雲はそこで、「あなたに宝姉さまのアラがさがせようものなら、あなたはそりゃご立派だってことになりましょうよ。わたくしこそあなたにおよびもつかぬってものですけれど、あのかたなら、あなたにおよばないってことはありませんものね。」

このように、黛玉は欠点のある人である。しかし曹雪芹は『紅楼夢』で主人公の宝玉を描く時、彼をけなすような言葉をどのぐらい使っただろう。第三回で宝玉と黛玉が初めて会う時、作者はこのような詞で宝玉を評価した。

わけもないのに愁わしげ
ときに憑かれた人のよう
随分と押しだしだけは立派だが
見かけ倒しのなかみとは
世間知らずの時世おくれ
学問ぎらいのいしあたま
どうみても根性曲りのへそ曲り
世間の口など気にもせぬ
…

しかし、読者は決してこのような言葉に拘ることはないだろう。「仮(うそ)の真(まこと)となる時　真もまた仮　無のとなる時　有もまた無」[15)]15)と書いてあるように、作者は

교보문고 KYOBO Book Centre

貶すように見えても、実は褒めていて、褒めていそうに見えても実は貶しているということがある。このことは本作品の特色である。黛玉は時に、口が悪いのは事実だが、実は気のいい人である。自分より上の人の機嫌をとることもないし、下人達をいじめることもない。本当に素直で、心の清い人である。また、けちくさい人でもなく、下人達に対しては実は優しい。それは第二十六回に書いたある日常の出来事から分かる。

> 佳蕙はその返事を聞くなり、駆けこんできて、サッサト寝台に腰をかけ、笑いながら、「もうけちゃったと。さっき、庭で洗いものしてましたら、宝玉さまが林の姫さままでお茶の葉を届けよと言いだされ、花のお姉さん(花襲人)がわたしにその届ける仕事をくださいましたのね。ところがちょうどご後室さまのところから林の姫さまへお銭(あし)が届いて、あちらのお女中がたに分けていらっしゃるところでしたの。わたくしが行ったので、姫さまは二つかみわたくしにつかんでくださったんですけど……さあ、どれだけあるかもわかりませんが、預っておいていただけません？」と、さっそく手帕を開いて、銭をあけましたので、紅玉がそっくり勘定して預かってやります。

黛玉に対して、宝釵は欠点のない人だと『紅楼夢』の中の人々は言っている。前の例で、湘雲は黛玉に「あなたに宝姉さまのアラがさがせようものなら、あなたはそりゃご立派だってことになりましょうよ。わたくしこそあなたにおよびもつかぬってものですけれど、あのかたなら、あなたにおよばないってことはありませんものね」と言った。確かに、宝釵は容貌もきれいだし、詩も上手だし、振舞いも謙虚で礼儀正しい。また、いつも人の身になって考える。湘雲の詩社を開くために、カニの料理を用意してあげる。黛玉の体の調子をよくするために、燕の巣を送ったりする。しかし、『紅楼夢』の中に宝釵についてこのような描写もある。第二十七回で、宝釵は大観園の中で蝶を捕る時、不意に下女の紅玉らの秘密の話を聞いた。そして危うく気づかれそうになった時、

15) 曹雪芹と高蘭墅(1962)『紅楼夢』伊藤漱平訳、平凡社、p8。

교보문고 KYOBO Book Centre

宝釵はわざと足音を立てておいて、笑いながら声をかけ、

「ちゃんたら、そこへ隠れなさったの見とどけましたわよ」

そう口にしながら、わざとまえへ駆けて出ました。

亭のなかの紅玉と墜児は、窓を推したとたん、宝釵がこう言って駆けよってきたものですから、ふたりともアットばかりに驚きました。そこへ宝釵は逆手にでてこのふたりに笑いかけ、

「ねえ、林の姫さまをどこにお隠ししして？」と問ねます。

そこで墜児が、

「さあ、林の姫さまなどお見かけはいたしませんでしたが。」

「だってわたしはね、いましがた川向うから黛さんがこちらにしゃがんで水遊びしてらっしゃるのをお見かけしてるのよ。さとられないようにきてびっくりさせたげようと思っていたのに、まだそばまでこないうちに、向うでわたしに気がついて、東の方へ逃げだされ、それきり見失ってしまったの、奥にでも隠れてらっしゃるんじゃないこと？」

…

ところで紅玉は、宝釵のはなしを聞いてすっかり真に受け、彼女を遠くにやりすごすと、墜児の手をとって、言うのでした。

「さあ、大変…林の姫さまがここにしゃがんでらしたのなら、きっといちぶしじゅう聞いてらしたに違いない」

宝釵は確かに人々をいろいろ手伝ったことがある。しかし、それは自分の評判によい時限りのことである。いったん自分に不利なことが起こったら、ほかの人はどのようになるかも考えず、まず自分を守る。宝釵は実は思慮深く、世渡り上手の賢い人である。表は温良恭倹のように見えるが、裏では冷たくて、功名心のある人である。

第三十二回、下女の金釧は王夫人(宝玉の母)に無実の罪を着せられ、井戸に飛び込んで、死んでしまった。みんな悲しくなって、王夫人も涙が出て、「これがわたしの罪でなくってどうしようね」と言った。しかし、この時、宝釵はこのように言った。「そりゃ伯母さまはお情深いおかたですから、そうもお考えでございましょう。でも、わたくし思いますには、あの人はそんな腹立ちまぎれに井戸へ身投げしたのではなくって、たぶん実家(やど)へ下っているうちに、井戸のそばでふざけ

교보문고 KYOBO Book Centre

るかなにかして、足をすべらせ落ちこんだものでございましょう。あの人は奥勤めの窮屈な目にあいつけていたわけですから、こんどのように一旦お暇がでたとなると、あちこち羽を伸ばして遊びまわったとして、なんの不思議もございませんわ。どうして身投げするまでに癇癪を起こすわけがございましょう。よしんばそれほどまでに癇癪(かんしゃく)を起こしたにしましても、それならそれでよほどのお馬鹿さんということになりましょうもの。惜しむにあたりませんわ。」と王夫人を慰めるために言ったので、王夫人の機嫌をとったが、あまりにも冷たい話だ。

そして第四回に顧み、薛宝釵は都に来る原因をみる。「ほかに娘がひとりあり、薛蟠より二つ年した、幼名を宝釵といいます。…ところで近ごろ、いまの陛下が学問礼教にみ心を寄せられて、ひろく才能ある者を召されんがために、格別のおぼしめしで、妃嬪(中宮)を選び召されるのほかに、顕官名家の姫君についても、みな自発的にその名をその筋にまで届け出させ、そのなかから公主(内親王)や郡主(親王の娘)が先生について学問を修める際の勉強相手を選んで、才人(さいじん)・賛善(さんぜん)(女官の官名)の職に任ぜられるとのご沙汰が降されました。……薛蟠はかねて都こそは天下第一の繁華な土地だと聞かされていますもので、一遍遊びに出かけてと思っていた矢さきのことでもあり、これを機会(しお)に、一つには女官候補になろうという妹を送りとどけるため、二つには親戚を訪問するため……」宝釵はこの都に来るのはもともと女官になりたかったのだ。彼女の功名心はまた下の詩の中からも見える。

臨江仙
薛宝釵
白玉の 堂の前 春を舞いつつ
東風(こち)を得て みなまろく 捲きえたり
蜂とれ 蝶と群れ 乱れ飛びい
いくそたび くも水に随いし
塵の世に 身を委ねんや

교보문고 KYOBO Book Centre

万の 千の絲(いと) おしなべて
るも 分かるるも なれば
紅顔のな笑いそ もと根のなしと
よき風よ 力を貸して
を送れ のはたてに

上記の点で、宝釵は紫の上また黛玉とは違う。紫の上は光源氏またはそのような社会には本心をもっての従順者で、本当の温良恭倹の人である。黛玉は虚偽な功名が嫌いで、婚姻の不自由な制度の下でも自由で理想的な愛情を求め、その社会の反逆児だとも言える。宝釵と紫の上とは表面上において似ているが、実は本質的な違いがある。素直で清い心をもっているほうから見ると、むしろ黛玉と紫の上は同様だとは言えよう。

Ⅲ.それぞれの花 それぞれの芳しい香り

花は古くから美女を形容するものだとされている。例えば、代表的なものに、「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」という美人の姿を形容する言葉がある。

花の世界には、美しいものがたくさんあり、その美しさ、芳しさはまたそれぞれである。それに対して、美女である黛玉、宝釵と紫の上も、自らの個性がある。

3.1花は桜

桜は、日本では、古来、花王と称せられ、日本の国花とし、古くは「花」といえば桜を指した。ほとんどの日本人は桜が大好きだ。『源氏物語』では紫の上をこの美しく、高貴な花に比喩していた。

교보문고 KYOBO Book Centre

気高くてきれいで、さっと匂いの立つ気がして、春の曙の霞の中から美しい樺桜の咲き乱れたのを見いだしたような気がした。(二十八巻 野分)

これは紅紫かと思われる濃い色の小袿に薄臙脂の細長を重ねた裾に余ってゆるやかにたまった髪がみごとで、大きさもいい加減な姿で、あたりがこの人の美から放射される光で満ちているような女王は、花にたとえて桜といってもまだあたらないほどの容色なのである。(三十四巻 若菜下)[16]16)

『源氏物語』はある時代には『紫の物語』とも呼ばれていたという。それは、紫の上は理想的な女として描かれていること、『源氏物語』正編の全部に光源氏から最も愛され、尊敬されること、また、彼女については、少女期から終焉までほとんどその一生が作中に語り尽くされているためでもある。

紫の上の美しさをほめたたえる言葉は、恐らく光源氏への賛仰と同じぐらいに数多く繰り返され、いつも他のそれぞれの特徴のある女君の誰よりも美しく魅力的であると書かれている。

彼女は唯、美貌であるだけでなく、賢く、情が深く、心がよく行届いて、裁縫や染色の技術まで見事にやってのける申し分のない主婦である。少々嫉妬深いのが欠点であるが、そのことが光源氏のような色好みの男にとっては、別の魅力にもなり変って行く。つまり、すべてにおいて、中庸を得た瑾のない珠のような女が紫の上なのであろうが…[17]17)

しかしこのような理想的で、光源氏に愛されていた女性だが、その一生は本当に幸福であったろうか。

藤壺の姪で、藤壺に似ているのがきっかけで光源氏に連れられて二条院に来たのはむしろ若紫の悲劇の始まりだと言えるだろう。14歳の時から光源氏と結ばれたが、後まで世間から正妻とは認められず、このことが彼女の苦しみの原因にもなっている。また自分の努力を経て、光源氏に最も多くの寵愛を得て第一夫人にもなったが、恋多く愛人達がたくさん存在する光源氏のことにもずいぶん傷付けられていた。最後、身分高貴な女三宮の出現は紫の上にもっと大きい打撃

16) 紫式部『源氏物語』与謝野晶子訳、http://www.genji.co.jp/yosano/yosano.html。
17) 円地文子(1974)『源氏物語私見』新潮社、 p183。

교보문고 KYOBO Book Centre

をもたらした。

紫の上はやはり世を去った。しかし「千年をも、もろともに」と誓い合った最愛の紫の上の香りが光源氏の心からは、去ることはなかった。

3.2無情もまた人を動かす

第六十三回、宝玉と黛玉、宝釵たちと花占いをする時、宝釵のあたったくじの上には牡丹の花が画かれた。「艶冠群芳」と題して、下には、「さもあらばあれ無情もまた人を動かす」と書いてあった。

牡丹は中国で花王とされている。『紅楼夢』では、美しい女性はたくさんいるが、この中で最も美しいのは、普通、黛玉及び宝釵を並べて言う。しかしこの二人の中でもっと美しいのはどちらか言おうとしたら、たぶん宝釵にあたるだろう。第五回にこのような表記がある。「ところがこんどこうして突然薛宝釵という少女が出現してみると、年齢は黛玉よりそれほどいっているわけでもないのに、品はあるし容貌のはなやかな美しさにかけては、黛玉もかなうまいと人の多くは取り沙汰するくらい。」とあるからだ。

本稿は第二章第二節で宝釵の性格についてすこし分析したが、その性格のできた原因を見たら、宝釵も実はかわいそうな人だと思う。第四十二回黛玉に封建的教育に合わない本を読まないように勧める時、宝釵にはこのような話があった。

> あなたの眼にはどんな人間に映ってるかわかりませんが、これでわたしもずいぶんとやんちゃだったんですのよ。そう、もう七つ八つの子供の時分から、やんちゃにかけては一人前でしたわね。わたしのうちも、まあ読書人の血筋を引いてるってことになりましょうが、祖父もなかなかの蔵書家でした。ところが以前、家族も多い頃、姉妹兄弟がいっしょに暮らしていたのですが、みんなまっとうな書物を読むのを毛嫌いしてましてね、兄弟たちのなかには、詩の好きな者もおれば、詞の好きな者もおるというあんばいで、例の『西廂記』『琵琶記』などから『元人百種(明の臧晉叔(ぞうしんしゅく)編の「元曲選」のこと。元人の雑劇百種を収める。)』といったものまで、まずないものはないほど。それもあの人たちがわたしたちにないしょで読んでいれば、

교보문고 KYOBO Book Centre

わたしたちはわたしたちで、あの人たちにはないしょで読むという風でしたわ。それがあとになって、大人に知れ、打たれる者は打たれ、叱られる者は叱られ、焼かれる物は焼かれて、それでやっとそうしたものと縁が切れました。

宝釵も小さい時そのような本を読んでいたが、大人達に厳しくしつけられて改めたのである。また幼い時から父が亡くなられ、兄もいたずらばかりで、宝釵は早々に母親の仕事を手伝い始めた。「父親が亡くなってからというもの、兄が母のいうことに耳をかたむけず、心配のかけどおしでいるところから、自分は学問も棚あげにして、もっぱら針仕事や家事にはげみ、つとめて母親の手助けをして苦労をさせまいとしているという風。」(第四回)

そのような環境の下では、宝釵もそれなりの生き方で行かなければいけない。そのような賢い人だから、その社会の悪弊も実はよく知っている。第三十八回、宝釵の吟じたカニの詩の中にはこのような句がある。世間の人間をひどく風刺するのである。

眼前の 道路には 経緯とてなく
皮裏なる 春秋は 空しく黒黄

この詩は宝釵の人柄に似合わなさそうだが、彼女のことを深く検討すれば理解できる。また彼女の詩作や話の中で、露骨に世の中の人を風刺するのはこれが唯一のものである。でもこれだけあったら、読者はもっと宝釵をかわいそうに思うだろう。

3.3ひとり立ち 世に傲る[18)]18)

前に述べた花占いの時、黛玉のあたったくじは芙蓉のくじであった。芙蓉は脱俗の風があり、黛玉の気質にふさわしいと思う。古来、中国の文人達はみんな芙蓉という花が好きだ。芙蓉を詠える詩や文章がたくさんある。それと同じ、黛玉

18) 原文は ひとり立ち 世に傲(おご)る 友どちのありや(林黛玉:『菊に問ぬ』)

교보문고 KYOBO Book Centre

を賛美する人も多い。

黛玉は生まれながら病気があり、幼い時に母に亡くなられまた父を失い、親戚の家で寄食していた。しかし才知が優れているし、心も素直で優しい。宝玉と互いに唯一の知己となり、また彼を深く愛していた。しかしその封建社会の下で、その両親とも失った場合で、その貴族のお姫さまの身分では、黛玉はどうしても自分の愛を宝玉に伝えられない。また他の人にも理解してもらえない。

黛玉は宝釵と紫の上に比べたら、欠点のある人である。しかしこの欠点は彼女の生きていた厳しい環境からつけられたのである。そしてこの欠点があるからこそ、黛玉は小説の中の人のように見えなく、現実の中で生きている人のように見える。この欠点こそ無数の中国人の心を動かしている。林黛玉を言えば、歴史の中に生きていた人のように感じる。楊貴妃や王昭君、李清照のように、本当に生きていた有名な人のように感じる。黛玉と黛玉の詩は文学史の中でいつになっても必ず煌めいていく。

胭脂の色 艶なるは なににたぐえん
花の色とも はた人の 涙とも
ここにいま 涙もて に比せんに
流るるは 涙にて 媚ぶるは花か
涙目に 花観なば 涙りやすし
涙乾り 春の尽き 花もやつれて
やつれたる 花のう やつれした人を
花は飛び 人は倦み はやれぬ[19]19)

Ⅳ. 結論

『源氏物語』と『紅楼夢』が書かれたのはどちらも男女不平等の時代であった。『源氏物語』は主人公である光源氏の生涯を軸に、貴族社会の人間関係を描く長編小

19) 曹雪芹と高蘭墅(1962)『紅楼夢』伊藤漱平訳、平凡社、p454。

교보문고 KYOBO Book Centre

説であるが、最も素晴らしい部分は、作者がきめの細かい筆触で、平安貴族の女性の関係と心理状態また彼女たちの悲劇運命をいきいき描写している。葵の上、明石の姫が、「政略結婚」のせいで、人生の不幸や悲劇の境遇になった女性の例、空蝉、　朝顔、　大君という女性が反抗意識を持つけれど、自己否定による男性否定であって、常人の行い得る道ではない。その中に、最も代表的なのは紫の上である。彼女は絶世の美貌を持ち、多芸多才で心も優しく、本当に理想的な女性だと言える。そして、紫の上の忠実な愛は絶えず光源氏の色好みによって裏切られるとしても、なだらかで本心をもって光源氏またはそのような社会に従順にしていた。これは、平安時代の女性に対する審美的観点にふさわしい。男性が世の中を統治している時代なので、女性にとっては、従順は最も重要な徳とされていた。紫の上はその従順さを終始一貫した。それゆえ、紫の上は作者にして、国色の桜とたとえられていた。

『紅楼夢』もその当時の審美的観点にふさわしい理想的な女性を描いた。それは宝釵である。宝釵も美しくて才知高く、また礼儀正しく、封建的制度の下での習わしやしきたりをよく守っていた。しかし、曹雪芹はまた時代に先んじた人である。彼は自分のいる時代の虚偽と暗黒をよく知っている。その時の人々は功名に傾き、出世のために勢力あるものに媚び、弱いものをいじめる。女性をも軽蔑し、しきたりを持って女性たちを束縛する。また、これに従順な女は「賢女」とされ、逆らう人は懲らしめられる。宝釵はこのような「賢女」である。いつもしとやかな姿で出場し、周りの人々からいい評判を収めるが、作者は読者を局外に立たせ、その幕の後ろをもよく見せた。そして、宝釵は実は世渡りの巧みな人に過ぎないことが分かった。

しかし同様に貴族のお姫さまの身分を持ちながら、黛玉は虚偽の功名心がなく、自分より上の人にお世辞を言うこともないし、自分より下の人を見下げることもない。もっぱら詩の世界を探求していた。また婚姻の不自由さを知りながら、虚弱の身をもって理想的な愛を求めていた。これは、当時の社会においては、一種の反逆だとも言える。しかし、この反逆児の力はやはり弱くて、彼女は自分の運命を変えることもできないが、また濁世に陥るのも好まないので、もっぱら詩と愛の純潔な世界を追求していた。容姿も美しく、心も清く、また才気

교보문고 KYOBO Book Centre

もある。中国では、牡丹は花王と称されているが、また富貴の花ともされ、人にはすこし浮華な印象を与える。古来、文人達から最も好評を受けるのは実は芙蓉である。芙蓉は脱俗の風があるので、中国では花仙の別称をもっている。花の神仙ともいえるこの芙蓉と、世間にあるすべての花、花王の牡丹も含み、みな芙蓉と同列に論ずることはすべきではないだろう。

以上の二作のヒロインについての分析からみると、紫式部と曹雪芹は女性に対する考え方は同じところもあるし、違うところも顕著である。二人とも女性の美しさと才気を賛美した。だから、二作には才色兼備の女性がたくさんいる。そして、男性中心社会における女性の悲惨な運命も見通している。しかし、紫式部は当時の貴族たちの審美にしたっがて、理想的な女性紫の上という人物を作った。紫の上から作者の面影が見えると言える。これは作者本人の女性に対する判定基準であるし、当時の社会の判定基準とも見なされる。でもこのような理想的な女性は世の中にめったにないだろう。そういう点からみると、曹雪芹は女性の優れるところだけでなく、欠点も生き生きと描写した。要するに、曹雪芹はもっと主観的に女性のいろいろな個性を描き出した。いずれにしても、黛玉、宝釵と紫の上はみな甚だ優れた人であり、またそれぞれ個性をもち、その人物像は日中文学史上空前絶後の人物像だと言えよう。特に、黛玉と紫の上はそれぞれ中国と日本の古典文学史上の女性人物像の第一人者だと言えよう。

교보문고 KYOBO Book Centre

참고문헌

曹雪芹と高蘭墅(2002)『紅楼夢』人民文学出版社。
曹雪芹と高蘭墅(1962)伊藤漱平訳『紅楼夢』平凡社。
馮其庸(2004)『馮其庸点評紅楼夢』団結出版社。
葉琳(2000)「『源氏物語』、『紅楼夢』女性形象之比較」『日語学習与研究』第3期
円地文子(1974)『源氏物語私見』新潮社。
鎌田敏夫(2004)秋冬号『別冊和楽』小学館。
陶陶(1990)「異曲同工的哀歌—論『源氏物語』与『紅楼夢』主題的悲劇性」『紅楼夢学刊』第 4 号
周青(1990)「紫姫与薛宝釵—両個封建淑女形象之比較」『国外文学』第 2 号
黄燕尤(1991)「気質相同精神迥異—黛玉、紫姫形象之比較」『寧夏教育学院・銀川師専学報』第 3 号
紫式部『源氏物語』与謝野晶子訳http://www.genji.co.jp/yosano/yosano.html(2014)

❖ 투고일 : 2014.06.30
❖ 심사완료일 : 2014.07.24
❖ 게재확정일 : 2014.08.12

KYOBO 교보문고
교보문고 KYOBO Book Centre

Abstract

『源氏物語』と『紅楼夢』についての比較研究
－ヒロインを中心として－

周　硯舒

『源氏物語』は、11世紀の初め、紫式部によって完成され、日本の古典文学の最高傑作だといわれている。『紅楼夢』は中国の清の時代、曹雪芹と高鶚によって完成され、中国の文学史上の頂点だと言える。この二作は、成立年代がかなりはなれているが、相似するところが多い。そして、この二作のヒロインと言える林黛玉、薛宝釵と紫の上についても、似ているところがたくさんある。大きく見れば、三人とも貴族の出身で、幼い時両親またはその一人が亡くなった。そして、三人とも才色兼備な女性であったが、どちらも結末は不幸であった。しかし仔細に見れば、この三人の身の上、結末についてもやはり違いがある。そして、恋愛についてもそれぞれである。紫の上は光源氏またはそのような社会には本心をもっての従順者で、本当の温良恭倹の人である。黛玉は虚偽な功名が嫌いで、婚姻の不自由な制度の下でも自由で理想的な愛情を求め、その社会の反逆児だとも言える。宝釵は紫の上また黛玉とは違う。宝玉には激しい愛情が見えない。また、最も重要なのは、三人の性格は異なっている。特に、紫の上と宝釵は古代の保守的制度の下で理想的な女性とされているが、二人には実は本質的な違いがある。宝釵は実は思慮深く、世渡り上手の賢い人である。表は温良恭倹のように見えるが、裏では冷たくて、功名心のある人である。宝釵と紫の上とは表面上において似ているが、素直で清い心をもっているほうから見ると、むしろ黛玉と紫の上は同様だとは言えよう。黛玉は宝釵と紫の上に比べたら、欠点のある人である。そしてこの欠点があるからこそ、黛玉は小説の中の人のように見えなく、現実の中で生きている人のように見える。

『源氏物語』は、紫の上を桜とたとえている。『紅楼夢』は、林黛玉を芙蓉、薛宝釵を牡丹に比喩している。この三つの花は、違う土壌に生まれ育てられたが、同様に美しく芳しい花が咲いた。しかし、それぞれの特質を持っている。拙作は、林黛玉、薛宝釵と紫の上の相似と相違について探究することを試みた論である。これをもとにして、二人の作者の女性観についても分析したいと思う。

Key Words：紅楼夢、源氏物語、黛玉、宝釵、紫の上

교보문고 KYOBO Book Centre

Abstract

A Comparison of the Heroines in the Tale of Gengi and the Dream of the Red Chamber

Zhou, Yan-shu

A century ago, *The Tale of Gengi* created by Murasakisikibu became the masterpiece of Japanese literature. Seven hundred years later, *The Dream of the Red Chamber* written by Cao Xueqin and Gao'e led Chinese classic literature to its peak. Although there was a long period between the two great works, there are many similarities with their major female characters: Lin Daiyu, Xue Baochai and Murasakinoue. All three were born in royal families with a bitter childhood and with the loss of parent. Beautiful and talented as they were, they suffered to the end. Nevertheless, they were different in their family backgrounds, deaths, and love. Murasakinoue was obedient and loyal to the society represented by Genji as a kind and reverent woman, while Daiyu had a strong aversion to hypocritical scholarly honor and social ranks, pursing her ideal love freely under the feudalistic marriage system, as a social rebel, but Baochai was another type with no love for Baoyu at all. But the most important thing is that the three characters had their unique personalities. In particular, as the ideal women figures under the social system, Baochai and Murasakinoue differed essentially. Baochai was sophisticated, thoughtful, and obedient but cold and snobbish. Similar to Baochai, Murasakinoue was integral and pure, which was actually very similar to Lin Daiyu. Compared with Baochai and Murasakinoue, Daiyu was a feature with flaws, but it is the flaws that make Daiyu lively.

In *The Tale of Genji*, Murasakinoue is compared to sakura, and Daiyu and Baocha are compared to Furong and Mudan in *The Dream of the Red Chamber*. Sakura is the national flower of Japan, while Mudan and Furong are regarded in Chinese culture as the king of the flowers and the Flower Fairy. It is true that the three flowers root in various lands, but they are all well known for their fragrance. Based on the discussion about the similarities and

교보문고 KYOBO Book Centre

differences in the three major female characters, the article intends to make a further study on the women's view of the authors.

Key Words : The Tale of Genji, The Dream of the Red Chamber, Lin daiyu, Xue baochai, Murasakinoue

KYOBO 교보문고

교보문고 KYOBO Book Centre